



みんなが助かる！
みんなで助ける！
～災害に強い地域をつくるために
必要な防災とは？～



今日の流れ

1

これまでの振り返り

2

ありたい姿の共有
～みらいワークショップ～

3

アクションアイデアの検討

4

Check-out

今日の流れ

1

これまでの振り返り

2

ありがたい姿の共有
～みらいワークショップ～

3

アクションアイデアの検討

4

Check-out

この部会で目指すしたいこと

江戸川区地域自立支援協議会 (区ホームページより)

障害者の地域における自立した生活を支えるための中核機関

- 関係機関等のネットワークの構築
- 情報共有を推進する

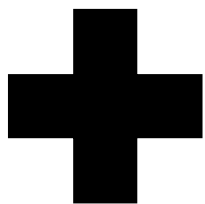


災害時自立支援部会

- みんなが助かる方法を本気で考える
- 実行に移す道筋をつける

これまでの2回の部会

12/16
地震編



2/10
水害編



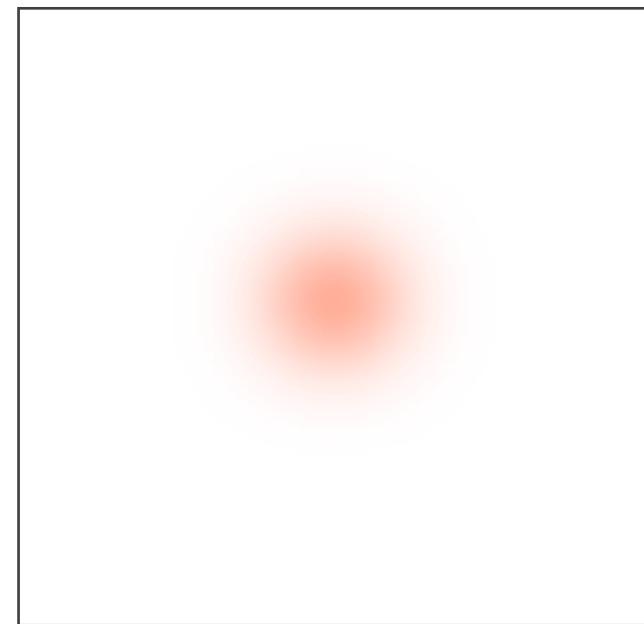
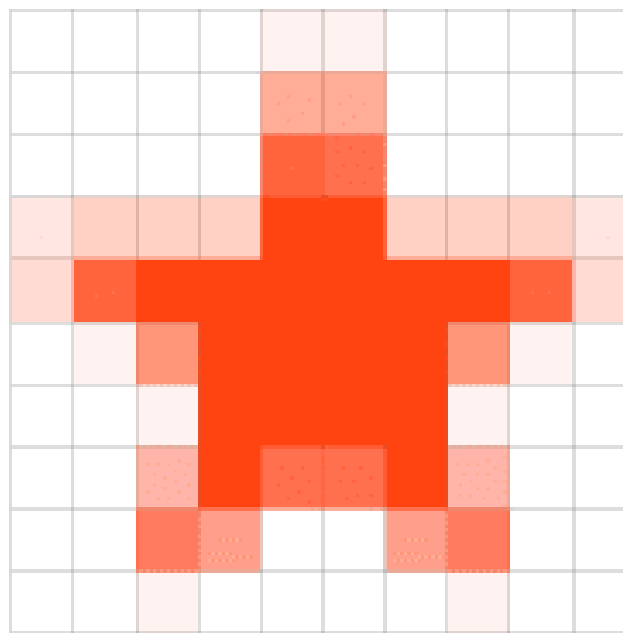
様々な課題
様々なアイデア

皆様の力が発揮されました

当事者や、当事者に
近い人が見えている課題



そうではない人の場合、課題は
「ぼんやりとしかわからない」または
「みえない」



このようにまとめました



来年度の「災害時自立支援部会」は？



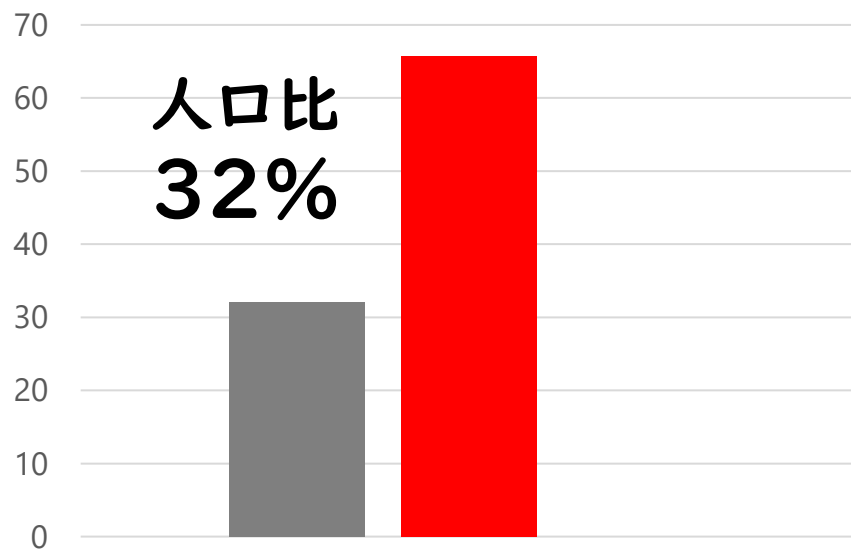
今日は来年度のアクションについて考えます！

11年前の東日本大震災

津波で18,420人の命が失われました

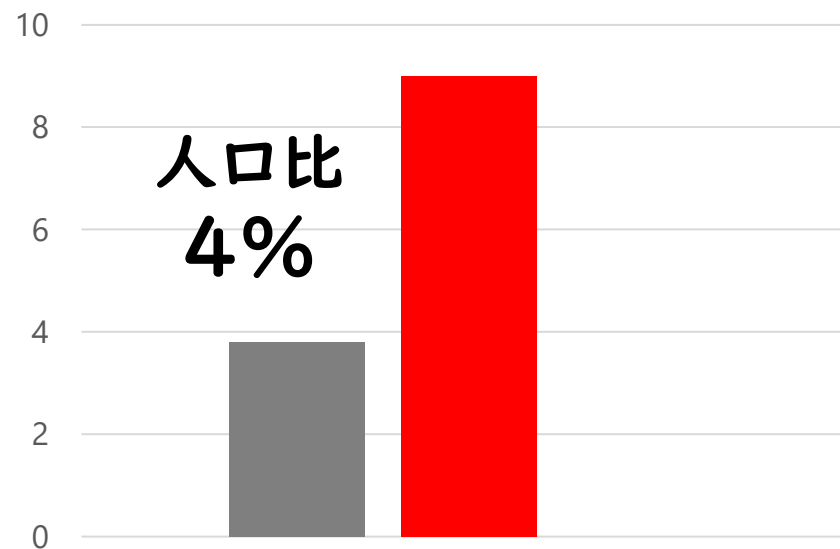
高齢者
(60歳以上)

犠牲者比66%



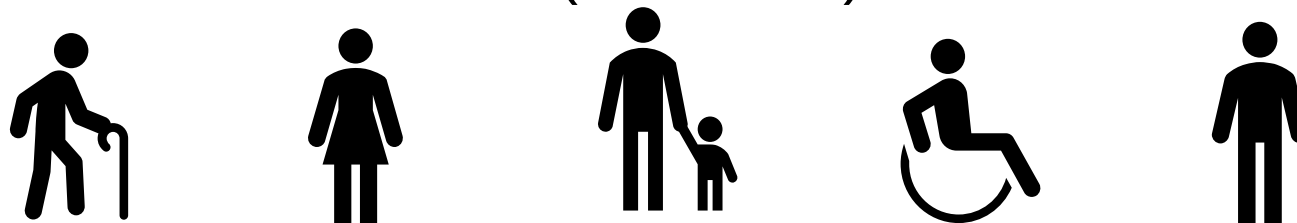
障害者

犠牲者比
9%



国内でも海外でも確認されていること - 災害時、誰一人取り残さない

災害対策基本法の「基本理念」(2条の2)



みんなが
助かるた
めに

みんな
で助けるた
めに

五 被災者による主体的な取り組みを阻害することのないよう配慮しつつ、被災者の年齢、性別、障害の有無その他被災者の事情を踏まえ、その時期に応じた適切に被災者を援護すること。

国内でも海外でも確認されていること - 災害時、誰一人取り残さない

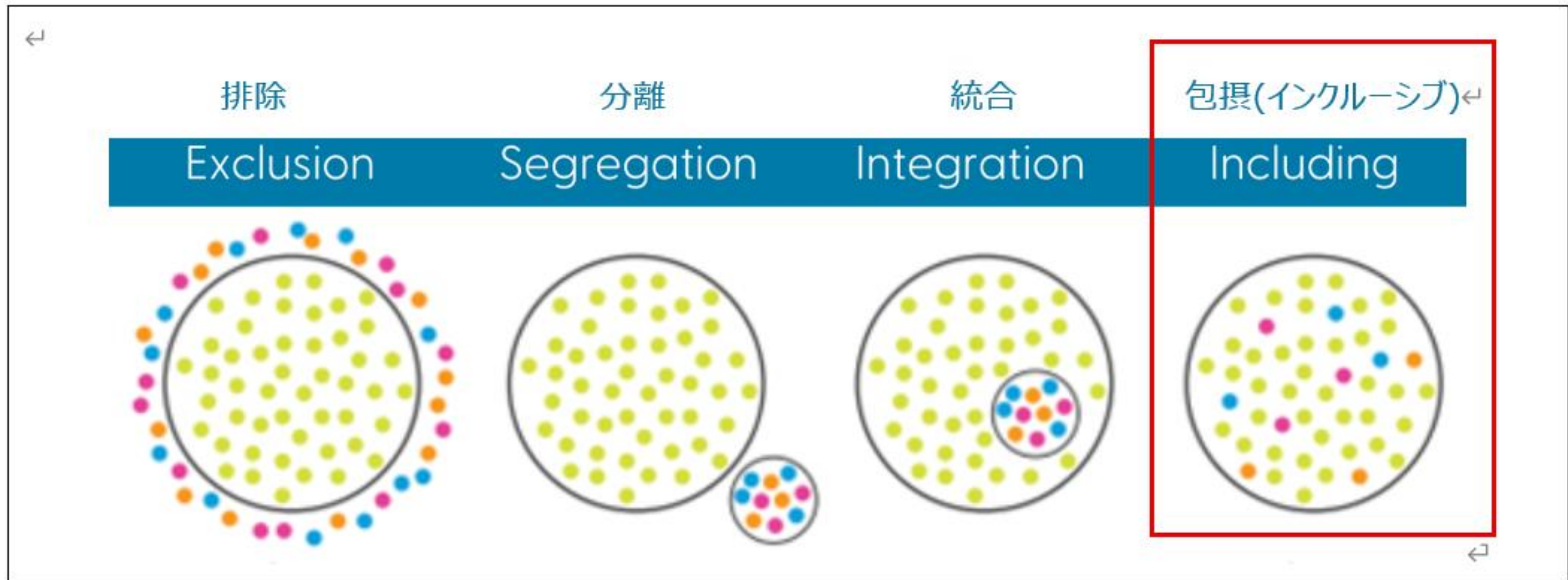
国連防災世界会議



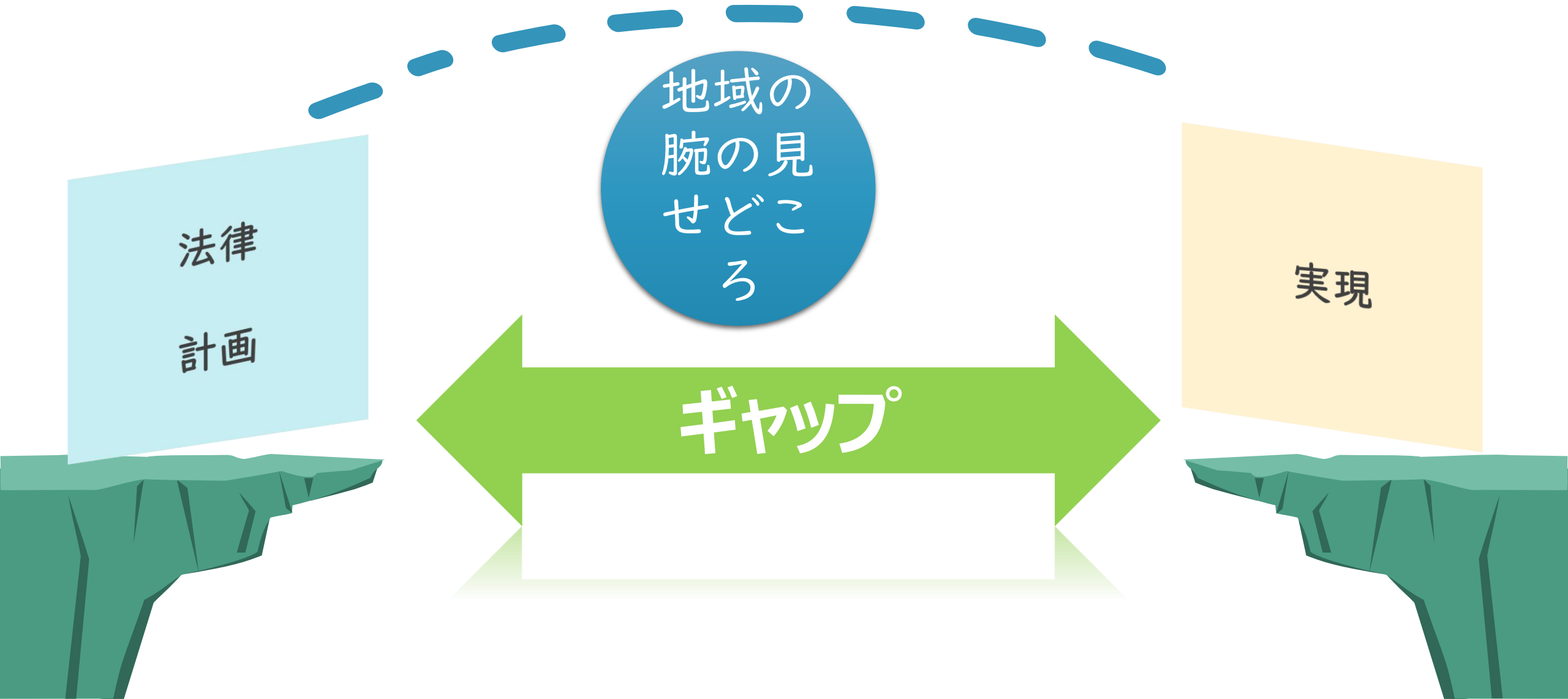
UN World Conference on
Disaster Risk Reduction
2015 Sendai Japan

- 誰一人取り残すことのないインクルーシブ防災を原則とすることが確認
- インクルーシブ防災を進める上で、様々な個別のニーズを持ちその解決に取り組む当事者と関連組織が、大きな役割を果たすことが期待

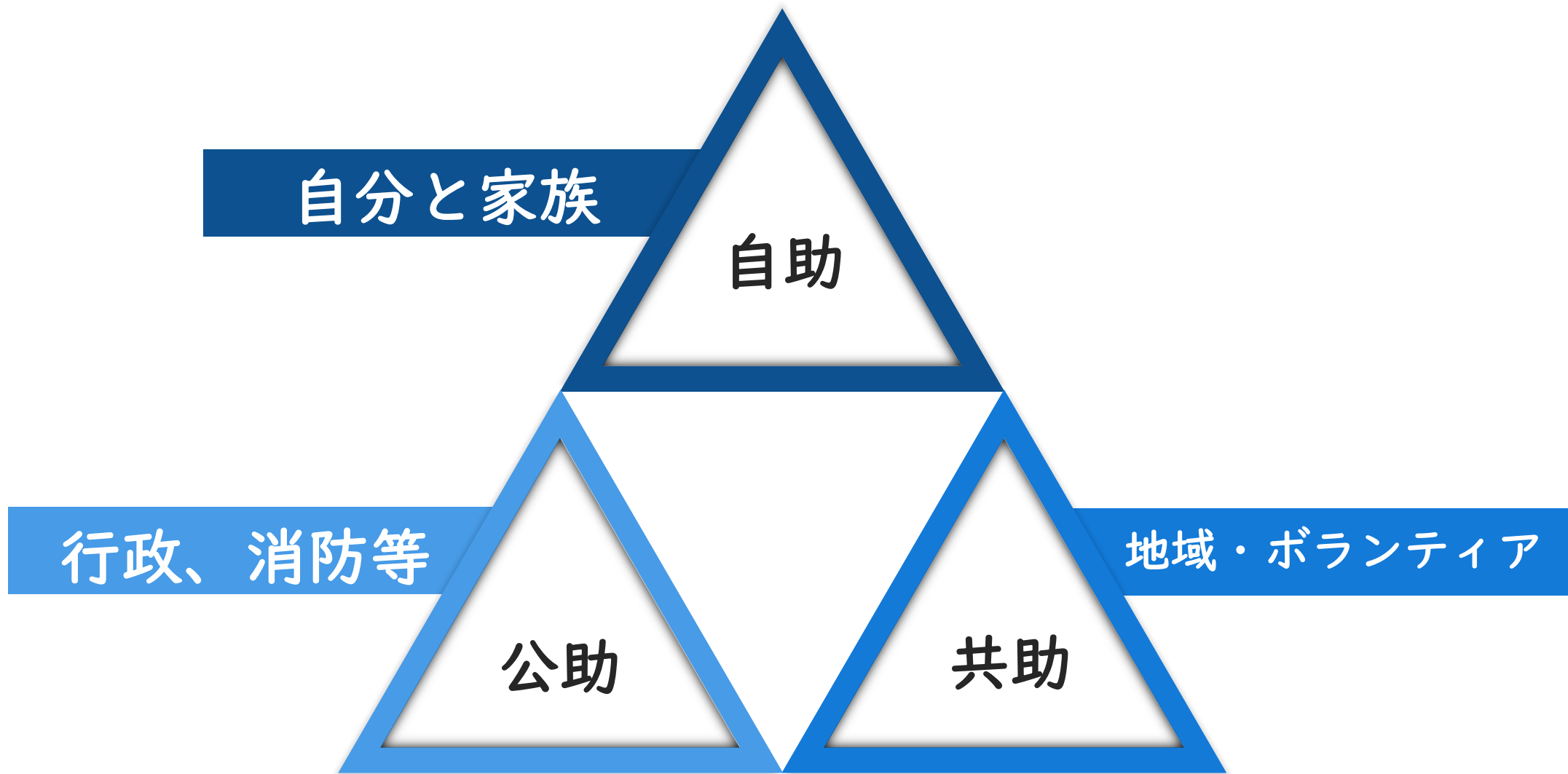
「インクルーシブ防災」という考え方



とはいえ、「書いてある」ことは、自動的に「実現」するわけではない



防災や災害対応は誰が行う？



住民と江戸川区役所職員の数比較

江戸川区民
の人口

約69万人

190:1

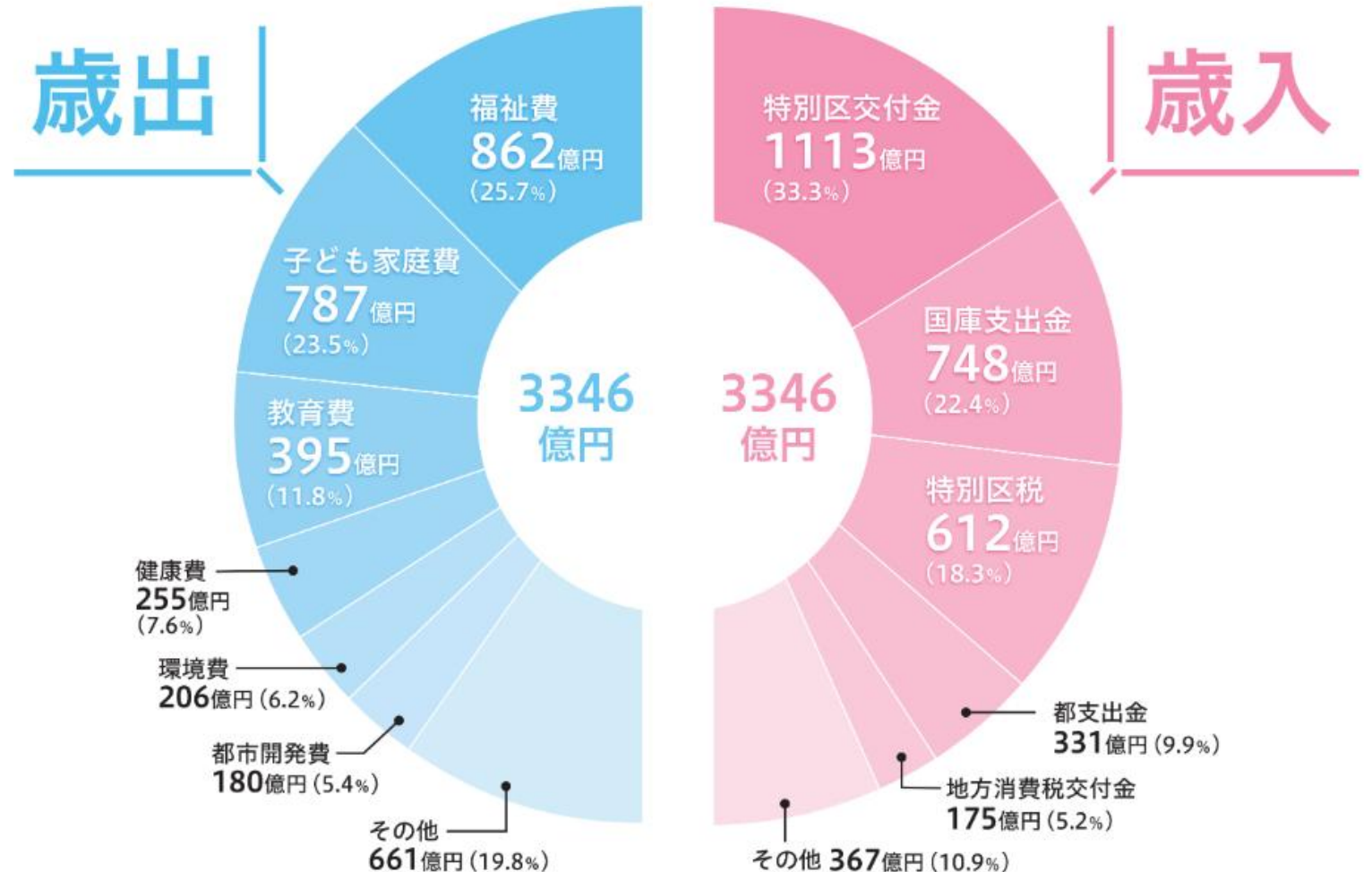
区役所職員

約3,600人

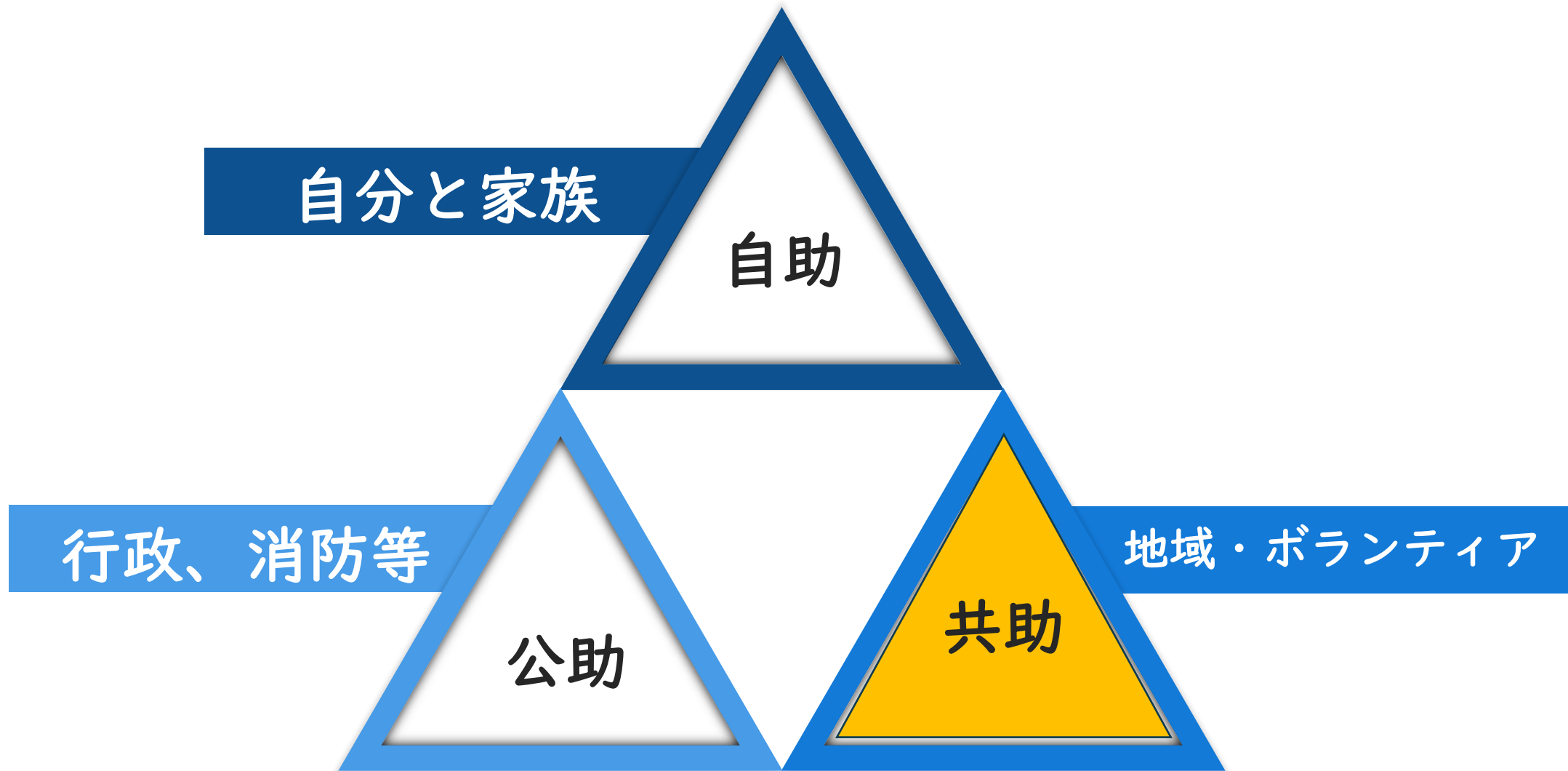
自治体の資金は限られている

区の本年度の一般会計の当初予算のうち、防犯・防災などの経費は 14億円(0.4%)

パイを大幅に増やすことは難しい。
でも賢い使い方はできる。



共助はどうでしょう？



理念で終わらせないために – 来年度の部会

多様なス
テークホ
ルダーと
ともに



知恵を絞
りながら
実践する



個人やし
くみを交
革する道
筋を見出
す

今日の流れ

1

これまでの振り返り

3

アクションアイデアの検討

2

ありたい姿の共有
～みらいワークショップ～

4

Check-out

ウォーミングアップ：天使の聞き方

あ 相手の目を見て
い 意見しないで
う うなずき、あいづちを多く
え 感情表現豊か
お オウム返ししながら聞く

自己紹介(ひとり30秒)



みんなが助かる方法を本気で考え、実行に移す道筋をつける → バックキャストिंगで考える

「フォアキャストिंग」

過去の成功体験にとらわれて、延長線のまま将来を予測する方法

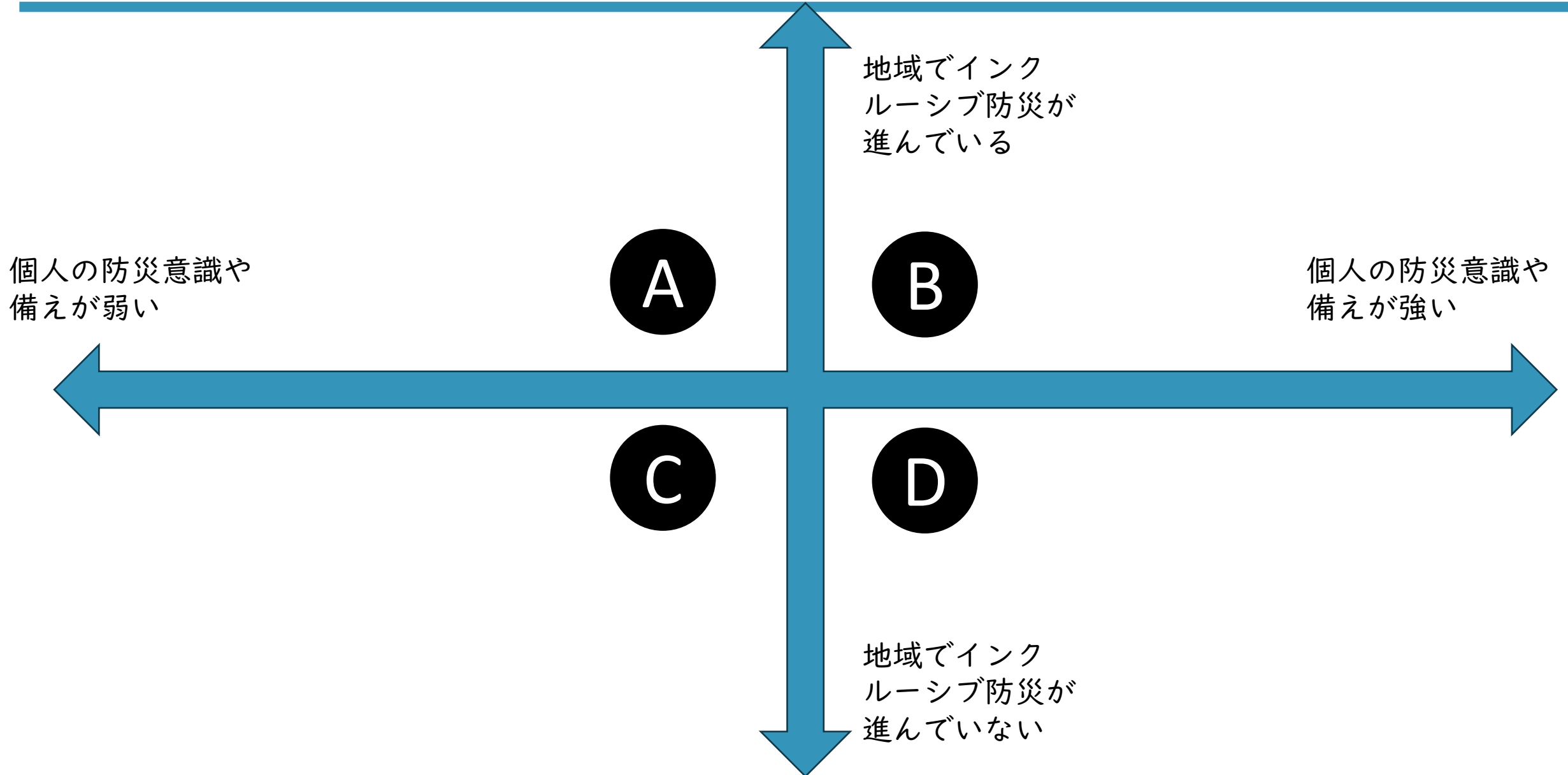


「バックキャストिंग」

複雑な問題が全て解決された
未来の理想的な姿（ありたい姿）を描き、そこを起点に
実現するためのアクションを考える発想法



2030年の江戸川区を想像しよう: 災害が起こったとき、命と健康は守られる?



地震用ガイド質問

- 当事者の地震の備えはできていた？
- 事業者の地震の備えはできていた？
- 大きな揺れがきたとき、大丈夫？
- 在宅避難はできている？備蓄品はある？
- 在宅避難が難しい方は避難所で過ごせる？
- 避難生活の間、命のリスクはない？
- 地域や行政の支援は届いている？支援の質は？
- 地域や行政の支援の質は？

水害用ガイド質問

- 当事者の水害の備えはできていた？
- 事業者の水害の備えはできていた？
- ひとりひとりが自分に合った避難先を事前に確保できている？
- 自力&個別避難が難しい人向けに、集団避難できる場所が確保できている？
- 水害が起こる前に避難が完了している？
- 避難に伴う負荷（お金、人、ものなど）は解決されている？

今日の流れ

1

これまでの振り返り

2

ありがたい姿の共有
～みらいワークショップ～

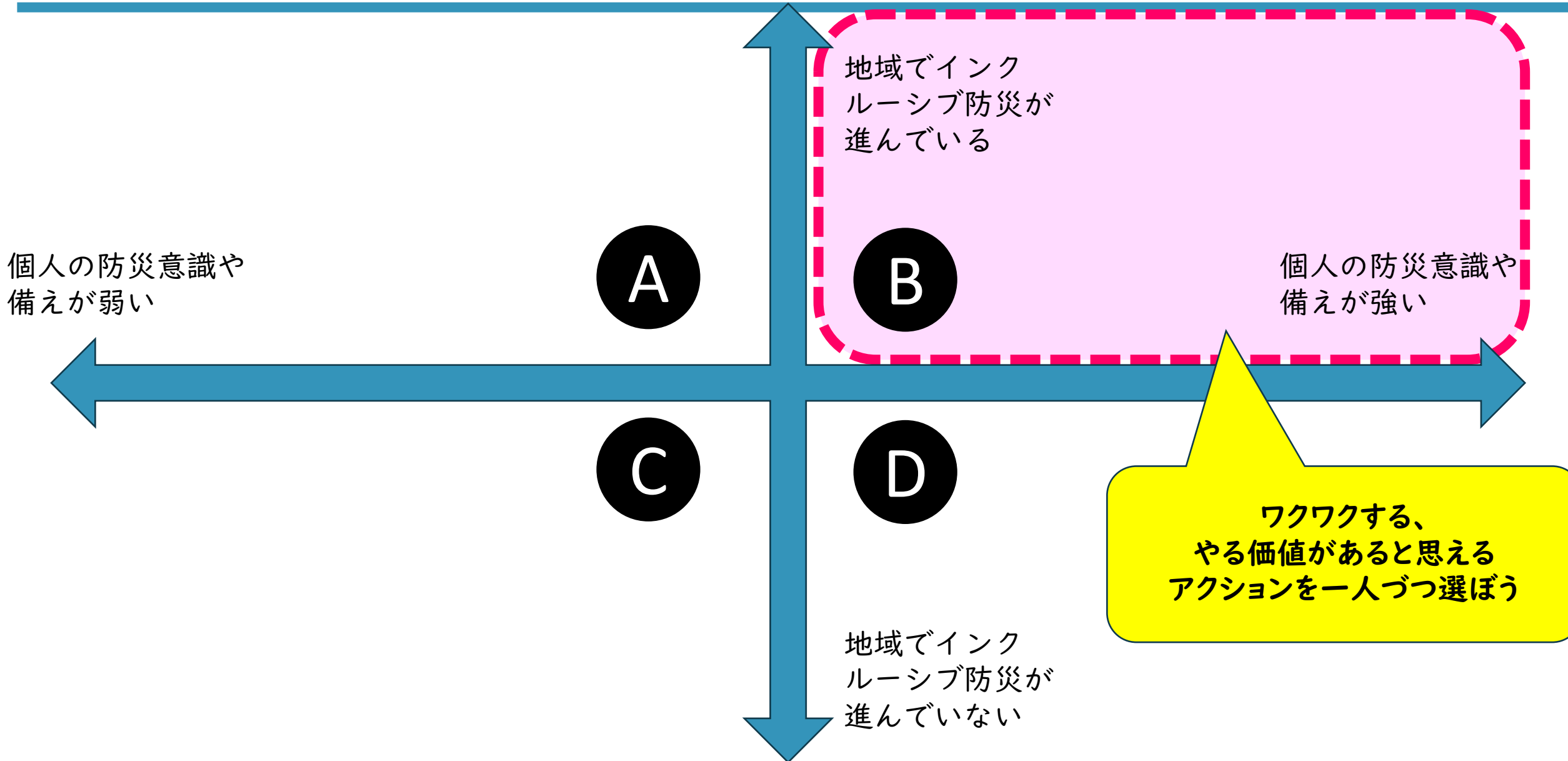
3

アクションアイデアの検討

4

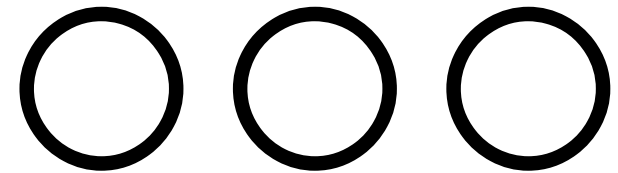
Check-out

ありたい未来に向けたアクションを考えよう



アクションを書いてみよう(3分)

各自、取り組んでみたい
or 実現してほしい「アク
ション・アイデア」を、A4
シートに大きく描きます。

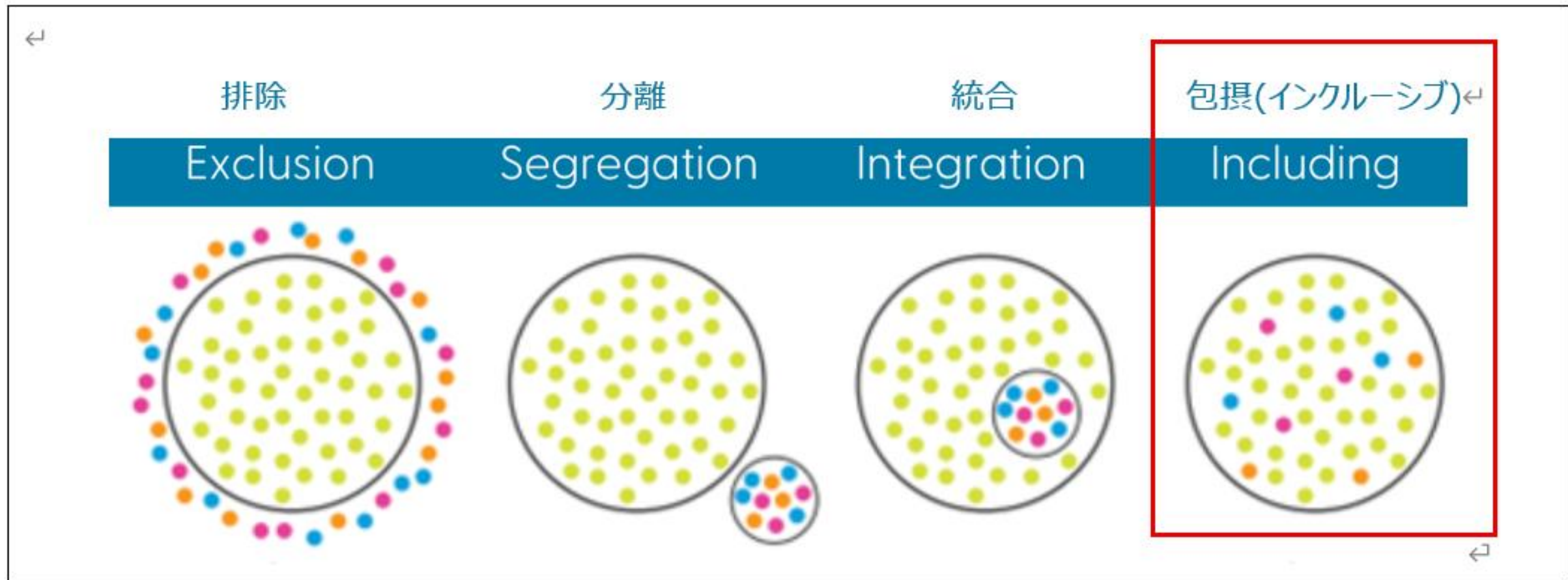


チームを作ろう

チームづくりの基準

1. 同じ内容を描いている人
2. 内容はちがうけど一緒になると化学反応がおきそうな人
3. 自分の考えを捨ててでも一緒に考えてみたい人

(再掲)「インクルーシブ防災」という考え方



大きくわけて4種類のアクションが提示されている

みんなが助かる江戸川区になる

江戸川内外でつながる、
多様なステークホルダーで変えていく

②地域とイ
ンクルーシブ
防災を進め
る

③より良い
公助のあり
方を研究し、
提案する

④支援の資
源を開拓す
る

①個人・当事者コミュニティの防災力を強化する

一人一人がリスクを理解し、防災対策を実行できるようにする

楽しみながら「自分事」にする学びとツール

体験型企画

調理を通じ、身体を動かしながら
楽しくインプットと対話



防災を日常に

具体的で使いやすい ツールの開発



普段のバッグ

防災仕様に



意思疎通のための
指差しマニュアル

ピア・サポートによる 知見の共有

同じ立場である被災経験者の講演を通じ、
受容段階に合わせた寄り添いを行う



同じ立場である被災経験者の講演を通じ、
受容段階に合わせた寄り添いを行う

安心を継続させる環境づくりと相互扶助

障がい特性に合わせた 室内安全化

当事者目線で家具配置を
工夫し、避難ルートを実際に
歩いて触知度を高める



在宅避難を支える 共助ネットワーク

独自の避難マニュアルを整備し、
不足しがちな特殊食品などを開通し合う



日常のサービス内での期限管理
備蓄品の入れ替えを支援者が日常前に
サポートし、意識が高まる時期に対策を行う

平時の備え：つながりと安全の土台作り

顔の見える関係と特性理解

行筆や訓練を通じ、障がい特性（見えない障害等）への理解と相互信頼を高める。



室内安全化の直接支援

家長の固定や断捨機をボランティアが手伝い、恒帯ことの安全性を高める。



非常持ち出し袋の準備サポート

重い荷物の作成補助や備蓄品の期間管理を増援全体で呼びかけ、備えを日常化する。



緊急時・避難生活：命と生活を支える連携

迅速な移動支援と安否確認

投資障害者や車椅子利用者の避難を付き添い、近所付き合いの端で安否を確認する。



情報保障とリソースのシェア

給水等の情報を確実に伝え、発電機や衛生スペース（おむつ交換等）を共有する。



避難生活における具体的な支援項目

支援カテゴリー	具体的なアクション例
情報の橋渡し	給水場所や物資配布情報の代行収集と伝達
電源・衛生	発電機の貸し出し、福祉施設での衛生スペース共有
買い物・管理	不足した備蓄品の買い出し代行と期限管理の補助

住まいと移動の安全確保



安全対策への財政・技術支援
家具固定器具や飛散防止フィルムの購入、
不要な家具の処分費用を助成します。



実効性のある個別避難計画の策定
行政が専門的知見を活かし、各家庭に最適な
避難計画の作成を強力に支援します。



バリアフリーな避難経路の整備

災害時でも安全に移動できるよう、避難路の
障害物除去と街路整備を徹底します。

命をつなぐ医療と物資の保障



確実な電源供給と医療継続

蓄電池の購入助成に加え、避難先での処方
スキームや服薬支援方法を明確化します。



特殊物資の優先供給ルート

おむつ、医療消耗品、介護食などの特殊な
物資を優先的に備蓄・供給します。



避難所での物資事前備蓄

個別の準備が困難なケースを想定し、
避難所側で必須物資を多めに確保します。

①個人・当事者コミュニティの防災力を強化する

一人一人がリスクを理解し、防災対策を実行できるようにする

避難の「場所」と「タイミング」を設計する

公的避難所以外の「マイ避難先」を確保

知人宅や民間施設など、浸水域外の安全な場所を平時から複数確保する。



決断を自動化する「マイルール」の設定

警戒レベル3や交通機関の運休を、迷わず逃げる自分だけの合図にする。



特性に応じた通知ルートの構築

根拠や建物の特性に応じ、光やデジタル、人的ネットワークを併用して確実に察知する。



防災を「義務」から「日常」へ変える

エンタメ×防災で楽しみながら学ぶ

キャンプや親理コンテストなどの行事に避難訓練や備蓄活用を組み込む。



実践的なシミュレーションの実施

宿泊体験や夜期の歩行訓練を過じ、実際の避難環境を体感しておく。



日常へのルーティン化

散歩コースに避難経路を取り入れ、年2回の点検を恒例行事として定着させる。





水雪発生時、身体障がい者や医療的ケア児などの「要配慮者」が安全に避難するためには、行政による強力な支援（公助）が不可欠です。本資料は、場所の確保、情報の共有、移動のリソース、そして実効性を高める訓練の4つの視点から、公的支援のあり方をまとめています。



避難の「場所」と「体制」の整備



広域避難先の優先確保とマッチング



障がいの特性や医療的ニーズに合わせ、行政が最適な避難先を仲介・提示する。

自治体・施設間の公式な受入協定



地域の枠を超え、他県の自治体や専門機関と事前に公式な受入合意を練結する。

民間提携への公的保証



事業所が独自に確保した避難先に対し、行政が支援や保証を行い確実性を高める。



避難を可能にする「情報」と「リソース」

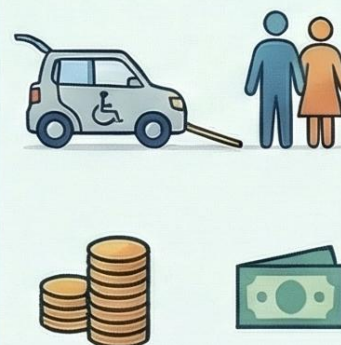


社会インフラの動きを「避難の合図」に



鉄道の計画運休発表（48時間前）等を、迷わず動くための客観的トリガーとする。

移動手段と人的支援のセーフティネット



福祉車両の手配サポートに加え、同行する介助者への公的補助制度を整備する。

訓練・実費への公的補助



宿泊型訓練の費用や、避難に伴う交通費・宿泊費の実費を公費で支援する。

コミュニティ避難がもたらす3つの安心

支援の継続性と 質の確保



職員と利用者が共に避難することで、
日常の人間関係と専門的なケアを
維持できます。

双方の負担を最小化



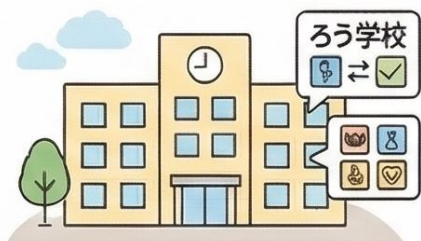
コミュニティ避難

環境変化による 不安の緩和



慣れ親しんだ集団で行動することで、当事
者の環境変化に対する不安を軽減します。

実践に向けた「避難先」と「連携」の開拓



専門性の高い避難先の確保

ろう学校など、特定の配慮（専門的コミュニケー
ション等）が整った施設を事前に開拓します。



特性許容型のネットワーク構築

障がい特性による動作や「こだわり」を許容し
てくれる場所や支援者と平時から繋がります。



事業所間での相互支援提携

浸水域外の他事業者と、災害時に利用者を
融通し合える公式な協力体制を構築します。

今日の流れ

1

これまでの振り返り

2

ありたい姿の共有
～みらいワークショップ～

3

アクションアイデアの検討

4

Check-out